



マッセ・市民セミナー
(NPO法人ちやいんどネット大阪共催)

大規模災害から子どもたちを守る

～阪神・淡路大震災、東日本大震災などの経験から学ぶ～

登壇者：社会福祉法人熱田福祉会大規模災害時対応
ガイドライン検討会アドバイザー
野津 牧 氏

日 時：令和3年7月7日(水) 14：30～16：30

会 場：藤井寺市立市民総合会館 4階 中ホール



マッセ・市民セミナー（中部ブロック研修）

大規模災害から子どもたちを守る
～阪神・淡路大震災、東日本大震災などの経験から学ぶ～

講師：野津 牧 氏（元名古屋短期大学）

日時：令和3年7月7日(水) 14:00～16:30

会場：藤井寺市立市民総合会館 中ホール

はじめに

皆さん、こんにちは。雨の中、お越しいただいてありがとうございます。紹介していただきましたが、じっとしていない男というふうに理解していただければと思います。いつも動き回っています。

実は、天王寺動物園の東側の出口のところに大きな断層が走っていて、岸和田の方までずっと続いています。北は豊中の方まで続いています。これがずれると大変な状況なのです。中部ブロックの方は海から比較的離れているので津波は来ないかもしれませんが、直下型地震でいえば、今回の熱海の豪雨災害ではありませんが、日本全国絶対に安全だという地域はないので、日々災害対応は考えないといけないと思っています。

そして、避難訓練もそうですけれども、災害対応をしっかりやれば本当に保育力が付くと思います。特に去年からの新型コロナの状況で、私もいろいろなところで講演していますが、「実は去年の4月、避難訓練ができなかったよね」という話をよく聞きます。あの状態で、もうそこまで手が回らなかったと思います。今現在の新型コロナをどう乗り切るのかという状況で、どうしても後回しになりやすいのですが、子どもの命は新型コロナ対応にも負けないぐらい大事な問題ですので、今日はちょっとそのお話をしていきたいと思っています。

先ほどご紹介していただいたのですが、名古屋短期大学というところで教えていたことがあります。国際ボランティアコーディネーターと名乗っているのですが、要するに「退職したら遊ぶんだ」ということで、ベトナムに春休みと夏休みの1か月、マンズリーマンションのようなところを借りて、のんびりと自炊生活をしながら、若い人たちがベトナムのホーチミンに来たときに、病院や孤児院を紹介・案内するというをやりたいくて、勝手にこのような肩書を名乗っています。

第1部 過去の災害から学ぶこと

1. 阪神・淡路大震災の取り組み

若い方の中には阪神・淡路大震災を知らない方もお見えになると思いますので、まずは阪神・淡路大震災を振り返ってみたいと思います。発生したのは1995年1月17日未明でした。午前5時46分、マグニチュード7.3の直下型地震でした。あのとき、淡路島では横に2.1m、上下に1.2m動きました。立ってられる状況ではなかったというのはお分かりだろうと思います。その後生まれた方たちも、何度も何度も繰り返して映像が紹介されているので、ビルが倒壊したりした状況はご存じだと思います。

日本で観測史上初めて震度7という地震が発生し、6,434人の貴重な命が奪われました。子どもの犠牲は8.8%で、9割方は圧死でした。しかも震度7はとても強い揺れですので、ほとんどの方は寝ていたと思うのですが、木造の家では1階がつぶれて2階が落ちていました。ですから、1階に寝ていた人たちは圧死という状況でした。

当然、保育所が開いている時間ではなかったのですが、もしも昼間にそうした大規模な地震が起こったら、事前の耐震補強がされていなければ、その場で子どもたちに「机の下に入りなさい」などと声を掛ける余裕もないままに振り回されてしまい、先生たちも耐えるのが精いっぱいという状況になるのではないかと思います。

後から生まれた方たちも聞かれたと思いますが、阪神・淡路大震災が発生した年は「ボランティア元年」といわれました。公式な数字では117万人の若者を中心とした人たちが駆け付けたといわれています。そのときからボランティアの運営の仕方が変わりました。以前は社会福祉協議会に登録した人が申し込んでボランティア活動をしていましたが、とにかく何とかしてあげたいという人たちが各々で現地に行って活動するという状況で、ボランティアの数は130万人とも150万人ともいわれています。

その中で、大阪の保育士たちが、神戸に駆け付けて避難所の子どもたちの臨時保育所の手伝いをしたり、神戸に住めなくなった人たちが大阪に避難してきて、そこの保育所で一時保育として受け入れたりしました。

災害時に避難所に駆け付けてボランティア活動をするのは、1958年の伊勢湾台風のときにもありました。体育館の中で子どもたちが遊べる状況ではありませんから、神戸の人たちは自分たちで考えて、子どもたちには遊びが必要だということで託児所を開設してボランティア活動を実践されました。

阪神・淡路大震災のとき、私は児童養護施設で園長をしていてボランティアを送り出す側だったので行けなかったのですが、東日本大震災のときは1か月後からずっと被災地に入っていました。しかし、阪神・淡路大震災の経験が伝わっていなかったので、子どもたちは本当に体育館の中で、泣くのも我慢してという状況を見聞しました。

阪神・淡路大震災のときには、心的外傷後ストレス障害（PTSD）という言葉が日本で初めて認知されました。それ以前はアメリカでベトナム帰還兵たちのPTSDの問題はありましたが、災害でこうした心の傷を負うのだということが日本で初めて分かりました。その教訓から、東日本大震災のときはすぐに臨床心理士たちが現地に入って、心

の支援を行いました。ただ、保育の方はほとんど入りませんでした。私の学校では学生がすぐに避難所を回って保育の活動をしましたが、最初はがれき撤去が大変だったので、全体としては、子どもたちは置き去りにされていたという感じを受けました。

2. 東日本大震災の取り組み

2011年、ちょうど10年前の3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0という観測史上最大の地震が発生しました。最大震度7で、沿岸部の多くが震度6弱から6強でした。ちょうど皆さんがお仕事をしている中部ブロック辺りは、南海トラフ地震が起こったらほとんどが震度6弱ぐらいになります。その辺を想定しながらお話しできればと思います。死者・行方不明者は2万2,000人で、阪神・淡路大震災の3倍以上です。

子どもの犠牲は約1,000人でした。ですから、人数はものすごく多いのですが、割合としては阪神・淡路大震災の半分程度になります。やはり昼間に発生したからではないでしょうか。子どもたちが保育所や学校にいて、先生たちが命懸けで守ったのです。東北でも大津波警報が出ましたが、東北の皆さんはみんな大津波警報をあつとき初めて聞いたのです。「大津波警報って、何?」「本当に来るの?」みたいなことから始めて、皆さんが映像で繰り返し見たような状況が生まれました。

東日本大震災のときは、仙台の北に牡鹿半島という半島があるのですが、その130km沖合で最初のずれが起こりました。1か所ずれて、それが連動して、日本海溝のプレートが南北500km、東西200kmの幅でずれたのです。幅が長かったので、当然揺れる時間も長かったです。阪神・淡路大震災のときは約12秒でした。12秒で何ができるといったら何もできませんし、しかも自分が吹っ飛ばすような揺れですからほとんど何もできませんよね。「机の下に入りなさい」と大きな声を出すことぐらいはできるかもしれませんが、自分も立っていることができないような状況です。

東日本のときは、それと同じような大きな揺れが3分間も続きました。東北の保育士さんたちに「揺れはどうでした?」と聞いたのですが、これで人生が終わるかと思うような揺れが3分ほど続いたということでした。ちなみに、南海トラフ地震はさらに幅が広いので、全部がずれると5分ぐらい揺れると思います。ですから、皆さんが保育時間中に今まで経験したことがないような大きな揺れが、しかも永遠に続くかのごとく揺れたら、「あっ、津波が来るんだ」と思っていただければいいと思います。

日本周辺では太平洋プレートがずっと日本列島に近づいてきていて、深さ8,000mの日本海溝のところで大陸側とぶつかってプレートが沈み込んでいます。沈み込んで静かにずっとずれてくれれば問題ないのですが、陸地側のプレートも引きずり込んでいくので、耐え切れなくなったときに一気に跳ね返ります。ですから、東日本大震災のときは、幅200kmにわたって海を押し上げたのです。もちろん太平洋側にも跳ね返ったのですが、200km分の海の水の固まりが陸地に一気に押し寄せてきたという感じでした。それによって牡鹿半島で5.3m動き、1.2m沈みました。考えてみてください。皆さんが今座っている場所が、いきなり5.3mまでずれるのですから、大変な状況ですよ。

牡鹿半島の付け根に宮城県女川町という所があるのですが、女川の先生に「揺れはどうでした？」と聞くと、「死ぬかと思いました」と言われました。「子どもたちはどうでした？」と聞くと、「テーブルの下に入ったのですが、子どもたちは床の上を滑っていきました」と言われました。皆さんのところでも、幼稚園の5歳児は多分そういう避難訓練をされていますよね。「机の下に入りなさい」と言われると「はい」と言っているとありますが、そのままずれていくのです。あるいは、私は福島県いわき市の学校で3年間教えていたので、保育士さんたちの知り合いが多いのですが、その方々に聞くと「天変地異でした」と言っていました。年長の先生に「どんな状況でしたか」と聞くと、「うちの園では子どもたちにテーブルの脚を持つように指導していて、子どもたちは持ってくれたのですが、テーブルごとびよんびよん跳ねていました」と言っていました。

女川に話を戻すと、未満児の先生に「子どもたちはどうでしたか」と聞いたら、「お昼寝中でした。子どもたちを部屋の真ん中に寄せないといけないと思ったのですが」と言われました。もちろん皆さんのところでもそうだと思いますが、午睡中の避難訓練などという大変なことはしないですよね。この園でもそうした訓練はしていませんでした。でも、未満児のどの先生も、「もう必死に手を伸ばして布団を真ん中に寄せ集めました」と言っていました。「それから、どうしました？」と聞きました。私は3人の先生に聞いたのですが、3人全員が「布団の上に覆いかぶさりました」と言いました。保育者魂というか、別にそんな訓練などしていないのですが、とっさに子どもの命を守らないといけないと思ったわけです。それは仕方ないと思いますが、私はできれば子どもたちの布団の中に一緒に入って、先生も自分を守ってほしいと思います。先生が血を流して倒れたら、子どもはパニックになりますよね。だから、先生も守る、子どもも守ることが大事ではないかと思います。

東北では毎年8cmぐらいずつ陸側に沈み込んでいました。そして、女川町では14.8mの津波が来ました。(写真を示し)奥が町立病院なのですが、そこに駐車場があって、避難した皆さんがそこから見ていました。「大津波警報って、聞いたことないよね。でも、来るんだよね」。実際にそこで見ていた人に聞いたのですが、見ていたらみるみるうちに女川湾の水が引いていったそうです。海の水が引くと津波が来ることは言い伝えて聞いていたので、「来るよね」と言っていたら、海の水がうおーっと黒く盛り上がって、一気に皆さんがいた駐車場の所まで来ました。車は流されて、ここにいた人たちはみんな病院の中に走って逃げて取りあえず助かりましたが、高台の下は全て流されたという状況でした。

私は石巻という所でずっと活動に入っていましたが、最初に1人で行ったときは、保育園の園長先生に渡されたのが、その日の満潮時刻などが書いてある潮見表でした。「先生、海の方に行ってもいいけど、これを持って行って満潮になるまでに戻ってきて。戻れなくなってしまうから」と言われました。つまり、地盤が沈下したので、満潮になると陸地も水浸しになるという状況でした。

石巻市の犠牲者は4,000人近くで、東北でも最多の犠牲者が出ました。プレハブ系の家は少し残りましたが、ほとんどが流されてしまいました。同じ石巻市では、2階の建物の上に観光バスが乗っかっているようなところもありました。

「東北の先生たちは頑張って子どもたちを守った」というニュースが流れましたが、実は残念ながら三つの園と石巻市の大川小学校では、命を守れなかった子どもたちもいました。大川小学校では74名の子どもたちが亡くなったというニュースはご存じの方も多いと思います。それも厳しい話なのですが、さらにその全ての学校、保育所、幼稚園で裁判になっています。未曾有の災害、1,000年に一度の災害だったから仕方がないということではなかなか通用しませんでした。まさに事故対応で保護者とのボタンのかけ違いが一つ生じると、裁判の話になってしまいます。難しい問題だと思いますが、裁判になってもやむを得ないという状況がありました。

石巻市に日和山という山があります。35mぐらいの低い山なのですが、その23mぐらいの所に日和幼稚園がありました。大きな揺れと同時に、園庭に子どもたちを避難させました。大地震のときは保護者に引き渡すというマニュアルがありました。園長先生と主任さんは知っていたものの、現場の幼稚園教諭の皆さんはそのマニュアルがあることすら知りませんでした。あのときはにわかには空が黒くなって急にみぞれが降り始め、本当に寒い日だったそうです。子どもたちも不安がります。園長先生は子どもたちを家に帰すために、子どもたちを2台のバスに乗せました。園長先生は、そこの園長になるまでは保育の経験がありませんでしたが、中学校の校長や教育委員会の指導的な役割をしていたので、避難のことを全く分かっていない人ではなかったのですが、「戻せ」ということで、マニュアルとは違う指示を出しました。

そして、2台のバスに分乗して子どもたちがスタートしたのですが、大きいバスの方は観光バスの運転手を退職した方が担当していて、観光バス会社にいたときに避難訓練の経験がありました。車に乗ってすぐにカーラジオを付けると3分後に大津波警報が発令され、6mの津波が来るという情報が流れました。園長が「出せ」というので動き始めましたが、既に渋滞が始まっていて、これは危ないかもしれないという運転手の判断で戻ってきて無事でした。

もう1台は、ご夫婦でアルバイトで小型の園バスを運転していたのですが、津波想定区域の門脇・南浜地区のルートで子どもたちを下ろしたのです。最初の子もだけは親がいましたが、他の家庭は既に避難していて、いなかったのです。途中、山裾に小学校があるので、そこに行きました。ここも津波が押し寄せて黒くなっていますが、黒くなっているのは津波火災で焼けただけだ所です。ここの子どもたちは先に階段を上って避難して無事でした。地域の人たちの指定避難所になっていたのここに避難していましたが、とにかく津波が来ましたので、教頭先生の案内で「早く校舎が上がってください」ということで、走って駆け上って全員無事でした。

津波が来る前に、ここに園のバスが来て、ここで保護者に引き渡しをしました。そのときに幼稚園から2人の先生が下りてきて、「園長がすぐ戻るように言っています」と

運転手に伝えました。それで戻ることにしたのですが、そのときの判断もまずかったです。幼稚園の先生が2人来て、「早く戻ってきてください」と言って子どもを連れて階段を上がれば、幼稚園の先生の足で2～3分、子どもを連れていても5分ぐらいで階段を上がって戻れたのに、バスに乗せてそのまま大渋滞に巻き込まれてしまったのです。

そして、200mぐらい走ったところで、運転手と添乗員と5人の子どもを乗せた状態で津波の被害に遭いました。実は、その子たちは西側のあまり津波が来なかった地域の子どもたちだったのです。人数が余っていたから乗せたということらしいのですが、親にしてみれば、なぜあんなに危険なルートに下ろしてしまったのか。そもそも下ろすような状況ではなく、保護者に引き渡すルールがあったのになぜ海の方に下ろしてしまったのかということになります。

これには後日談があって、運転手は窓ガラスが割れて奇跡的に助かりました。すぐに園に走って戻って園長に報告しました。園長もすぐ上の所まで見に行きましたが、がれきの中でバスがどこにあるのか分からない状態で、搜索を諦めて園に戻りました。皆さん、保育の仕事や公務員の仕事をしていると思いますが、もしも目の前に間違いなく子どもがいることが分かっていたら、その場を離れるでしょうか。親にしてみれば、「なぜ教えてくれなかったのか。もし場所を教えてくれたら、私は必死になって助けに行った」と思いますよね。

実際に裁判になって、仙台地裁での第1審では、訴えた保護側がいろいろな証言を集めていました。焼けただれたバスを発見したのも、園側ではなく保護者だったのです。そのすぐ上の所に住んでいた人は、その子たちかどうか分からないけれども夜中まで子どもたちの「助けて、助けて」という声が聞こえていたそうです。親にしてみればいたたまれませんよね。夜中まで生きていたかもしれない。結局は、保護者が焼けただれたバスと黒焦げになった子どもの遺体を発見したということです。

園側は、守りに入りました。園の先生たちも「大津波警報は聞こえませんでした。だから、大津波が来るなんて知りませんでした」と裁判で証言しています。実際、訴えた側は地域の人たちの状況に関する情報を集めていて、「園から80m先に防災放送のスピーカーがあって園の方に向いていたので、私の家にもちゃんと聞こえた。園の先生たちが聞こえないはずはない」と主張しました。裁判では、幼稚園教諭の証言にはわかには信じ難く、口裏合わせをしたと判断して、保護側が勝訴しました。そして、園側が上告したので、第2審判の高裁では決着を見ないまま和解という形になりました。保護側は「墓参りをして一言『悪かった』と謝ってもらいたい。防災マニュアルをしっかりするとか、避難訓練をきちんとするとか、防災体制をしっかりしてほしい」ということで和解しました。

宮城県山元町は、仙台の南側の平地にあるのですが、町立の東保育所でも裁判になりました。海から2km少しの所だったのですが、津波想定区域外で津波は来ないだろうと思われていました。でも心配なので、保育士を町役場に走らせ、総務課長に聞きました。「避難した方がいいですか」「いや、待機してください」「大津波警報が出ています

が、いいんですか」と聞き直しましたが、「待機してください」と言われて、園に戻って待機しているところに津波が来ました。

その後、総務課長は保護者説明会で、「待機せよとは言っていない。待避せよと言った」と言いました。保育士側は「普通、待避せよという言葉を使わないでしょう。私はちゃんと待機しろと聞きましたよ」と証言しました。裁判では、通常待避という言葉を使わないし、しかも保育士が「待機ですね」と確認しているので、「待機せよと言ったのは間違いないだろう」という判断になりましたが、なぜか原告側は敗訴しました。

町役場の責任はないことになったのですが、避難の仕方でも問題になりました。津波が80m先まで来たときに気付いて、みんな慌てて保育士や保護者の車に分乗して逃げ出しました。最初の3台はかろうじて逃げられましたが、残りの6台は津波にのみ込まれ、そのうち子どもが3人亡くなりました。しかし、2台目は先生が1人で乗っていて、3台目は園長先生が乗っていました。どさくさの状況ですから、慌てふためいて乗ってエンジンをかけて逃げたのですが、やはり保護者からすれば園長が先に逃げて、私の子どもは後に残されて亡くなったということで、怒りを買いました。本当に責めるのもかわいそうだという状況ですが、そういうことがありました。

同じ山元町のふじ幼稚園は、危ないかもしれないということでバス2台に分乗して、ずっと待機していて津波にのみ込まれ、8人の子どもが亡くなりました。この場合もやはり、なぜ車を出さなかったのかいうことで保護者が訴えて、最終的には仙台地裁で判決が出る前に解決金を払う形で和解しました。

最も大きかった問題は、石巻市の大川小学校です。74人の子どもと10人の先生が亡くなりました。北上川から3kmほどの所にあります。今は整備して公園にするということで景色が少し変わっていますが、津波想定区域外でした。でも、以前から校長と教頭と教務主任では、津波が来たときに三角地帯に避難するか、裏山に避難するか、結論が出ないまま当日を迎えました。校庭に50分ほど待機して、校長先生がいなかったので教頭先生が指揮するはずでしたが、教頭先生が決断できないまま50分過ぎました。教務主任は「裏山に逃げましょう」と進言しましたが、結論が出ないまま恐らくは50分後に津波が来たのだらうと思います。

そこから移動を始めたときに津波が来て、津波は当初、川から遡上してきました。川には海側に、8,000本とも1万本ともいわれる防風林の松林がありましたが、それを全部根こそぎなぎ倒し、ずっと川を流れてきました。橋に松の木が引っ掛かってしまい、津波がそこでせき止められた分がこちらにも流れ始めて、渦を巻くようにしていたそうです。4人の子どもは奇跡的に山側に打ち揚げられて、引っ掛かって助かりました。教務主任も助かりました。教務主任は教育委員会の聞き取り調査で、最後に子どもを追い掛けていって津波にのみ込まれたのですが、奇跡的に足が引っ掛かった状態で助かったので、足を必死になって抜いて、1人の子どもを助けて裏山に逃げたと言っています。

ただ、最終的には裁判になりました。事故対応もそうですけれども、いろいろ隠してしまったのです。ごまかしが出てくると、ほつれてきます。実は裏山に逃げて子どもと

教務主任は民家で一晚保護されたのですが、裁判になったときに地元の方が「先生は靴もズボンも濡れていなかったです」と証言しました。先生は先に逃げたのではないかと保護者たちは思いました。「裏山に逃げよう」と進言したのは教務主任ですから、恐らく裏山を見に行っていたのではないかと。そして津波が来て助けに行けるような状況ではなくなり、裏山からそのまま一人で避難したのではないのでしょうか。ただ、教育委員会の指示か何かで最終的に嘘をついて、結局何も言えなくなってしまった。彼はこの3月に定年退職を迎えましたが、PTSDの診断が出て2011年から10年間ずっと休職状態でした。保護者の前に1度出てきたのですが、一言、二言しかしゃべらなくて、結局何も証明してくれませんでした。最終的には最高裁で遺族側の主張が認められ、学校・教育委員会の責任が極めて大きいという判決が出ています。

津波は、校舎の2階の天井まで来ましたが、屋根は越えませんでした。すごい津波でした。鉄筋コンクリートの柱もなぎ倒しているような状況でした。裏山のシイタケ山は、子どもたちが普段から上がって活動していたので、保護者もみんな裏山に逃げているだろうと思って心配していませんでした。ただ、公立学校の難しさで、ここへの転勤経験がある人はほとんどいませんでした。2度目の人が1人だけいましたが、ほとんど勤続2～3年目で、裏山がどういう状況になっているか、どこが安全か把握できない状況で、決断ができなかったのだらうと思います。

私立園の皆さんは、園長先生もずっとそこで生活しておられるので、地域の実情をよく分かっていると思いますが、もしこの中に公務員の方がいたら、なかなか地域の事情を把握できていないところもあると思うので、やはりその辺の把握は大事ではないかと思えます。ようやく保存が決まって工事が始まっています。石巻市は残したくなかったと思えますが、世論に押されて保存が決まり、現在工事中です。

そしてもう1か所、学校管理下ではないのですが、野蒜小学校という東松島市の小学校でも児童が亡くなって、裁判になりました。日本三景で有名な松島町のすぐ北側です。東松島市は自衛隊の基地がある所で、今度7月23日に東京の空を飛ぶブルーインパルスの基地がある町です。奥の一番隅に小学校があり、まさか津波が来るとは思っていなかったようで、結局町じゅう全てが津波にのみ込まれました。その際に問題が起こったのは、児童の引き渡し的时候了。小学校では結構あるのですが、災害時や緊急時の保護者引き渡し名簿というものを作っていました。皆さんの園でも作っていますか。必要ですよ。知らない人に引き渡してしまったり、DVの問題がある父親に知らずに引き渡して連れ去られるという問題がありますからね。

この小学校は、名簿での引き渡しを行っていました。ただ、クラス担任に「〇〇君も連れて行くよ」ということで、「じゃあ、お願いします。連れて行ってください」と、その子の父親と知り合いだという人に引き渡しました。そして、子どもが津波の被害に遭い、遺族側が訴えました。「知り合いは知り合いだが、子どもの命を預けるまで任せただけではない。名簿があったのに、なぜ名簿に登録されていない人に引き渡したのか」という形で裁判になって、最高裁で遺族側が勝訴しました。ブログの方で引き渡し

名簿の見本なども紹介してありますので、まだ作っていないところは作った方がいいと思います。名簿を作って、その人だけに引き渡すということを教えてくれている事例だとも思います。

その他に、保育所や小学校で引き渡した後、あるいは当日休みだったかもしれないなど事情はちょっと分からないのですが、保育所、幼稚園、学校以外で亡くなった子どもたちが300人ほどいます。その相当数、恐らく100人ぐらいではないかといわれていますが、実際に保護者に引き渡した後で亡くなったのではないかといわれています。

岩手県の私立の大槌保育所では、保育所から避難した子どもたちは助かっていて、保護者に引き渡した9人の子どもが亡くなっています。後で触れますが、何となく皆さんの常識として、災害が起こったら保護者に引き渡せば安心という固定観念はありませんか。保護者に引き渡すまでが私たちの仕事だと思いませんか。でも、保護者は避難訓練をしていません。皆さん子どもを連れ戻して、家の中がぐちゃぐちゃになったから片付けようとしていて、そのときに津波が来てのみ込まれて流されたのだろうと推察されます。お母さんも子どもも亡くなっているのだから分かりませんが。しかし、園では避難訓練を月1回程度やっていますよね。ですから、その辺を安易に考えてはいけないのではないかと思います。

3. 熊本地震以降の取り組み

熊本地震の2週間後、私は益城町に入りました。4月14日と16日、大きな地震が2回ありました。4月14日ですから、新入園児の様子はまだよく分かっていませんよね。名前をぎりぎり覚えたぐらいでしょうか。小学校は、その週の月曜日に学校が始まったばかりでした。私は1年生の担任の先生とたまたまお話する機会があったのですが、その先生は「私は1年生の担任になって4日しか子どもと接してなくて、まだ顔を覚え切れていないのに来週から子どもが来るのですが、どうい話をすればいいですか」と質問されました。でも、災害が起こるのは4月1日かもしれないし、2日かもしれないのです。

そして、大阪府北部地震は早朝の時間帯に発生しました。園長先生はいません。そのときに的確な判断ができなければいけません。北部地震のときは皆さんのところも大きく揺れたと思いますが、実際に吹田の先生に聞くと、大阪市内に働きに出ている保護者が休暇を出してすぐに戻ろうとしたのですが、戻れたのは夜になってからという状況でした。大混乱の中で親も必死になって子どもを迎えに行くわけです。

東日本大震災のときに子どもを親に引き渡して亡くなったという話をしましたが、福島県では小学生の子どもを迎えに行こうとして、その子が見ている目の前でお父さんの軽トラックが津波にのみ込まれて流されていったという話もあります。早く迎えに来て、それで目の前でお父さんが亡くなるのを見た子どもは、「僕のせいでお父さんは亡くなった」と絶対に自分を責めますよね。そういう問題も教えてくれたのではないかと思います。

そして、熱海でも大きな災害がありました。西日本豪雨以来、災害がすさまじいですよね。大阪は絶対に台風が来ないとか、そんなことは考えられないでしょう。実際、2018年の台風21号はすごかったですよね。私はもちろんこちらにはいなかったのですが、関空があんな状態になるのかという状況でした。ちなみに、南海トラフ地震の政府の想定では、関空は滑走路が20～30cm水没し、3日後に復旧すると言っていますが、皆さん信じますか。台風21号の経験をされている大阪の人にしてみれば。大変な状況になるでしょう。

2019年の台風19号は、信濃川や多摩川の氾濫など、中部、関東、東北はひどい状況だったのですが、それが紀伊水道を渡ってたまたま来なかっただけの話でしょう。来ていたら同じような状況になっていたはず。台風19号のときは、これは保育所や幼稚園ではないのですが、実は警報が出て会社を早退して帰る途中に、冠水した道路に車ごと入ってしまい、30人ほどが水死しています。それが、引き渡した後の子どもたちになるかもしれませんよね。だから、本当に繰り返しますが、引き渡したから安全というわけではないのです。

もう一つ言いたいのは、後で紹介しますが、熱田福祉会では、子どもの命も守り、保護者の命も守り、職員の命も守るということを防災マニュアルに書いています。大阪の例ではないのですが、ある園の話です。園が開始した後に雨がひどくなってしまい、警報が出ました。すぐに先生たちは手分けをして、保護者に連絡して迎えに来てもらいました。そして、全員帰った後で園長先生が一言、「子どもたちは全員帰りましたので、これから職員会議を始めます」と言って、夕方まで会議をしました。保育園あるあるですよ。何かありそうな話でしょう。でも、そのときに先生たちが犠牲になっていたら大問題になるでしょう。園の信用問題になるし、先生たちの命の問題にも関わります。やはり子どもも守る、保護者も守る、先生も守るというマニュアルになっていることが重要だと思います。

大きな災害が起こったら、その災害から学びながらマニュアルを見直してみることです。「うち、マニュアルあったよね？ でも、見たことないな」では駄目です。大阪市では豪雨災害もマニュアルに入れるよう指導が来ていますよね。皆さんの市はどうですか。豪雨災害もマニュアルに入れてありますか。基本は津波対応ができていれば、豪雨災害も対応できます。

第2部 大阪でどのような災害を想定しなければならないか

1. 南海トラフ地震

大阪でどのような災害を想定しなければならないかという、まずは南海トラフ地震です。発生確率が30年以内に70～80%というのは、よく分からないですよ。海溝型の地震は比較的周期性を帯びているのは分かっています。南海トラフ地震は88年に1回ぐらい起こるといわれていますが、だからといって88年後に来るかどうかは誰も想定できません。もし来れば、最大でマグニチュード9.1、最大震度7になります。犠牲者は全

国で32万3,000人です。阪神・淡路大震災は6,400人、東日本大震災は2万2,000人でした。政府の推定では大阪府全体で7,700人が亡くなると推定していますが、大阪府は独自に調べ直して、府内で最大13万4,000人が亡くなると推定しています。

ライフラインの復旧も大変な状況です。電気などは比較的短くて1週間程度で復旧しますが、断水は恐らく1か月ぐらい続きます。ですから、皆さんの地域のように、津波は来ないかもしれないけれども水道が止まるかもしれない地域もあります。水を入れるタンクは用意していますか。

特に東海地震は幕末の安政地震以来、169年起こっていません。東海エリアで地震が起こると、今までは全て連動していました。どうも今の状況は、1707年の宝永地震のときに近いのではないかと地震学者は見ています。300年前に何が起こったか。実は、南海トラフの一番東端にある大きな火山は富士山なのですが、その富士山が49日後に噴火したのです。それ以来、噴火していません。もしも南海トラフがずれたら、恐らく富士山も噴火するのではないかとわれています。そうなると、この前の熱海の状況どころではありません。頂上は噴火しないだろうといわれていて、山梨側か静岡側だろうといわれていますが、もしも静岡側が噴火して溶岩が流れたら太平洋まで達するのではないかと。つまり、新幹線を越えて、新東名や東名を越えて、日本列島が寸断されるような状況になるかもしれません。それから、津波による犠牲者は、北は茨城県、南は沖縄まで出ると推定されています。

今日は大阪の話を中心にしていきますが、住之江区で震度6弱、津波は5mと予測されています。2～3mではないかという推定もありますが、最近話題になっているのはサイレント津波です。実は、東日本大震災で岩手県は震度5弱から5強だったのですが、17mの津波が来ました。揺れが少ないのになぜ大きな津波が来たのか。恐らくは日本海溝の斜面が崩れて、水が盛り上がったためではないかといわれています。

その危険性があるのはどこか、東北大学が調査したところ、危険な場所が他に2か所ありました。千葉の本更津沖と大阪湾の北側、尼崎辺りです。あの辺の斜面がもし崩れると、最初に大きな揺れが5分ぐらい続いて、まず北の方から津波が来ます。その110分後に和歌山の方からさらに大きな津波が来る可能性もあります。あくまでも推定でしかないのですが、何が来るか分からないという想定をしておいた方がいいのではないかと思います。

大阪が心配なのは、南海地震です。宮崎県沖まで被害が想定されます。ただ、例えば東海地震が来て南海地震は来なかったとします。でも、毎年3～5cm爪が伸びるぐらいのスピードで、緩やかながらも確実に日本列島に迫って沈み込んでいるので、今年来なければ、さらに10年、20年後、ひずみがたまった状態になります。日本列島は毎年プレートが動いているので、いつかは来る地震だと思っておいた方がいいと思います。大阪府は、13万4,000人が亡くなると想定しています。

この表は津波が来る場所ですから、皆さんのエリアは入っていないかもしれません。ここを境に西側は津波が来ます。一番分かりやすいのは、天王寺動物園と美術館のここ

ろの境もそうですし、住吉区と住之江区、堺市の堺区も津波想定区域です。北区は外れています。そのような状況で、南海本線辺りを起点に西と東では景色が全く異なる状況になると見た方がいいと思います。

ですから、対応の仕方も違います。1月に住吉区の保育園でZoomで研修をしたのですが、事前にお聞きしたら、「ライフジャケットはどうすればいいですか」「いや、園は15mの高さにあるから、日本列島が沈没しない限りは津波が来ないですよ。でも、西側の住之江区は大変な状況になります。津波が押し寄せてきたら一気に住之江区の皆さんが逃げてくるので、その人たちの支援を考えてあげてください」「ああ、そうですね」というふうになります。うちは大丈夫だから良かったではなくて、そういう対応になりますよね。

避難所も大阪市の場合、1人当たりの避難所の面積4㎡以上などといった新たな基準を設けましたが、少なくとも岸和田なども含めた海沿いの市はそういう状況ではなくなるでしょう。そもそも区内に残っていること自体が難しく、高いビルに上がって何とか津波をやり過ごすという状況になってくるので、みんな隣の区や市などに避難してきます。そういう状況になるのではないかと思います。

これは大阪のホームページに載っているのですが、大阪平野は昔は河内湾という大きな湾でした。つまり、東大阪市の外れの方までずっと昔は海だったのです。ですから、「外れてよかった」ではなくて、ここの区域にもし皆さんの市があるのだとすれば、当然地盤は弱く、液状化の問題が起こります。ここに大阪城がありますが、城は最も安全な高台に造ります。それから、四天王寺には幕末のときの津波の石碑があります。恐らくこの近くまで津波が来たのでしょう。先ほど言ったように、市の美術館辺りまで来たのだらうと思います。

2. 直下型地震

直下型地震はいつ来るのか、さらに分かりません。1995年の阪神・淡路大震災で直下型地震が起りましたが、現在は津波想定地域に指定されていなくても、かつて海があった場所に、皆さんの市があるのだとすれば、横にも断層が走っているので、ここも崩れる恐れがあります。北側は宝塚からずっと横の活断層があります。生駒山麓にも断層があります。南側には、世界最大級の中央構造線の断層が大分県からずっと走っています。大阪湾にも断層があります。そして、先ほど紹介した上町断層帯がずれると大変な状況になるのではないかとわれています。ただ、分からないのは、発生間隔が8,000年とか2,000年といわれているが、前回の記録が残っていないのです。地質調査をすると、その時期に津波が来たことが分かるぐらいの話で、正確な記録が残っていません。だから、零点何パーセントという極めて低い数字になるのですが、阪神・淡路大震災のときも直前の予測が0.02~8%であのように大きな地震が起きました。だから、いつ来るか分からないのが直下型地震だろうと思っておいていただければいいと思います。

次に、マグニチュードと震度についてです。マグニチュードは地震のエネルギーの大

きさです。つまり、100Wの電球が目の前にあればまぶしいぐらいにとても明るいですが、遠くだと暗いですね。100Wか20Wかという違いがマグニチュードです。そもそもの地震の大きさのことであり、近いか遠いかによって地震の揺れは違うことになります。東日本大震災はマグニチュード9.0、今度来るであろうといわれる南海トラフ地震は最大でマグニチュード9.1です。この0.1の違いは小さいのかなとも思いますが、実は1.41倍違うのです。ですから、南海トラフ地震では爆発的なエネルギーが発生することになります。ですから、死者の予測も非常に多くなっています。

3. 台風・豪雨災害

台風・豪雨災害を大阪だけ抜き出してみると、直近では2018年の台風21号で8人の方が亡くなっています。かつては室戸台風で大阪だけで1,888人が亡くなりました。このときは戦前なので、災害対応が異なるというのがありますが、警報が出ていたのに小学生たちが登校していたり、校舎が吹き飛ばされたという状況で多くの子どもたちが亡くなっています。規模でいえば伊勢湾台風が5,000人ほど亡くなっています。たまたまあのときは伊勢湾が大変な状況だったのですが、大阪平野の方に来ないとも限りません。

調べてみたら、死者が出る台風や豪雨は年に3回発生しているのです。ですから、あらゆる対応をしなければいけないということでしょう。保護者の職場の状況はつかめていますか。そういうことも必要になってくるのではないかと思います。当然のことながら、豪雨災害の方が浸水面積としてはさらに広がっています。あるいは皆さんの市でも、園だけは少し低めの所にある場合がありますよね。地名に新田などと付いていれば、田んぼが江戸時代に新たに造られた場所ですから、昔は沼地だった所かもしれません。去年の11月に泉佐野で講演したときは、「目の前に池がある」という話をしたら、「うちの園の場所には昔、沼がありました」と言っていました。そういう所もありますよね。

それから、保護者のことも考えてあげてください。皆さんの園の所は大丈夫であっても、例えば福島区の野田駅にある止水板を見ると、高さがせいぜい70cmです。南海トラフ地震の推定は5mの津波でしょう。来たら軽く越えますよ。大阪の地下鉄が一番深い所で33mぐらいの深さがあります。梅田駅だけで、地下に下りる階段は150か所ぐらいあります。その他駐車場から出るスロープなども含めれば200か所以上あるのではないのでしょうか。皆さんの園は大丈夫でも、大阪市内に働きに行っている保護者がいるでしょう。地震が起こって「お父さん、お母さん迎えに来てください」と言ったら、こんな状況で無理して地下鉄で来るのは危ないです。「まず、自分の命を守ってから。大変かもしれないけど、私たちが頑張って子どもたちを見ますので、ぜひ安全を確認してから迎えに来てあげて」と言ってあげてください。

特に東日本大震災でも迎えに来るのが遅かったのは、やはり学校の先生や公務員の人たちでした。放っておけないから働きますよね。そこに残らざるを得ないですね。皆さんもお子さんがある家庭は心配ですね。だったら、学校とよく話し合って、「私は保育園の子どもたちを守らないといけないから、幼稚園の子どもたちを守らないといけ

ないから、先生、子どもを守ってください。私は保育園の子どもを守るよ」という信頼関係が必要です。その段階で市役所などが間に入りながら、お互いに子どもたちをちゃんと守るような状況にしてあげないと、「津波が来るかもしれないので、子どもを迎えに行きます。さよなら」などと絶対に言えないですね。

第3部 どのように備えるか

1. 災害への備え

先ほどの繰り返しになりますが、保護者に引き渡せば大丈夫と思ってはいけません。それから、避難先は園庭や小学校と決めつけてはいけません。そのときの状況によって的確な判断をしなければなりません。

熱田福祉会の状況で説明しましょう。防災マニュアルの第1条「目的」には、「法人施設を利用する子どもおよび職員、保護者など、法人に関わる全ての人の命と安全を守る」と書かれています。「地域の協力を得て子どもたちを守るとともに、可能な限り地域住民や被災した子どもたちへの支援を行う」「子どもたち自身が年齢に合わせて自らの身を守る力を育てる」ということも目的に決めています。ぜひ参考にさせていただければと思います。

それからマニュアルも、熱田福祉会のものは私のブログには貼り付けていないのですが、参考になるように私立園向けの防災マニュアルのひな型、公立園向けのひな型も載せていますので、参考に見ていただければと思います。それから、当然ながら洪水・内水問題も入れています。保護者の引き渡しについても、一緒に避難するというを入れてあります。保護者も心配だから迎えに来ますよね。来たら「お母さんも一緒に避難しましょう」と言って、避難を一緒に手伝ってもらうようにしています。

その他の特徴としては、とにかくそのときの状況において最善を尽くすことです。実はあらゆる場面であります。石巻の避難所であったのですが、食料がなくて、高校の体育館でレトルトのカレー1袋を20人で分けて食べました。そのぐらい食べ物も何もないような状況だったのですが、受付の後ろには食料がありました。「それを出してくれよ」と言ったら、市の職員が「いや、配っていいかどうか課長に連絡取っているのですが、連絡が付かないので待ってください」と言われました。その場でそれぞれが最善を尽くすというルールを決めておかないと、先ほど言った大阪府北部地震のように早朝かもしれないし、園長先生に連絡したけど連絡が付かないかもしれません。そのときにいる職員で判断するという訓練が必要ではないかと思います。

あとは、災害後の問題も入れています。保育を早期に再開するということです。避難所に子どもとあれば、保育に欠ける要件は表面的にはなくなりますよね。でも、保護者は家の片付けや親族の捜索に行かなければなりません。何よりも仕事を失い、家族や身内を失い、全てを失った親は子どもと笑顔で接する余裕などありません。ですから、早く保育を再開して、臨時的保育所を設けてあげてほしいと思います。その点に関して熱田福祉会では、保育の早期再開と、被災者、被災した子どもたちの支援を行うという

ことを明記しています。

今度、法人本部が移転するのですが、現在そこを災害保育ボランティアのセンターにしようと考えています。情報発信をして、全国から救援物資を受け取ってみんなに渡したり、ボランティアを受け入れて、そこから必要な保育所や避難所に学生ボランティアや保育ボランティアを派遣したりすることを考えています。ぜひ市単位で、津波の被害には遭わないけれども隣の市をどう支援するのかということを考えてみてください。

名古屋市は東日本大震災が起きたときに、「救援が必要になってボランティアを派遣するかもしれない。派遣するスタッフを人選しておいて」と言ったのですが、結局誰も行きませんでした。つまり、救援要請が来なかったのです。来ないから出さなかったのです。公務員の発想として何となく分かります。

私は、分からないからすぐに4月に行って、避難所に入って、「こういう状況か。学生を派遣しなければ」ということで学生を連れて行きました。やはり分からなければ行って調べればいいのです。少なくとも大阪の人たちは阪神・淡路大震災を経験しているので、避難所には子どもたちが遊ぶ場所がないし、遊んでくれるスタッフもないことは分かっている。そして、皆さんの園は取りあえず無事だった。それなら、交代で誰か派遣してあげる、あるいは市単位で連絡を取り合いながら、「どこに入ろうか」というふうに動いていただければいいのではないかと思います。

直下型地震は耐震化するしかないのですが、実際に進んでいるところは進んでいるし、進んでいないところは進んでいません。大阪で講演したときも、耐震補強をしないといけないのだけれども予算がないという園がありました。経営の問題になると、やはり行政などが支援してあげながら、園児が集まっていないとか、そういう複合的な要因がいろいろあるのだと思いますが、共同募金会の大規模修繕などは2年に1回は使えますから、そのお金はやはり手を抜いてはいけません。何とかしなければいけないブロック塀があるならば、補助金をもらいながら、市と相談しながら対応しなければいけないのではないのでしょうか。

そして、園を作ったときは家具などは必ず固定してあると思いますが、後から継ぎ足した棚などはありませんか。公立は多分きちんとやられていると思いますが、私立園を見ると、後から備え付けた棚などを結構見ます。それから、棚の上や中のものが全部飛び出します。例えば、動物を観察するためのプラケースなどは落ちてきますよ。ですから、百均などで売っているシートを置くだけで結構落ちません。このぐらいだったら、お金の融通が利かないところで、園長先生の工夫で何とかなるでしょう。あと、ジェルなどは普通に売っていますし、そういうところからまず考えていく必要があるのではないかと思います。

それから、自分の園の周りの状況です。これは愛知県弥富市という所が作っているのですが、散歩コースの中でここはブロック塀があるから危険だとか、ここは川があるから危ないとか、大きな道路は信号が停電で止まるので、大渋滞して危ないとか、そこを渡って避難するのは事実上無理なので、「ここは危ないよね」というふうに園の周りを

全部調べています。そうすると、先生たちも散歩しながらいろいろ目が行くので、「ここは危ないよね」「ここは避けよう」という話になり、常に研ぎ澄まされてくると思います。

そして、自分のいる場所の標高などが分からなければ、簡単なのはマピオンという地図検索があります。ここは天王寺動物園ですけど、右クリックすると標高4mなど出てきます。皆さんの園も、住所を入れて右クリックすれば、簡易検索ですけど標高が分かります。「うちは意外と低いのか」とか「周りは高いよね。じゃあ、大雨のときは浸かりそうだ」ということが分かると思います。国土地理院のものの方がもう少し詳しいと思います。

それから、情報の取得です。停電したときにどうするか、保護者とどのように連絡を取り合うか、熱田福祉会では去年決めました。全保育士が保育時間中もスマホを持ちます。これは命に代えられません。当然、保護者にも伝えます。保護者も、保育時間中に保育士が携帯を触っていたら、「あの先生、仕事にあんなことやっていいの?」と言いますが、子どもを守るためにスマホは情報伝達する上で必要だというふうにあえて決めました。

情報に関していえば、大阪防災ガイドなどには登録していますか。市でやっているところもありますよね。それから、保護者との連絡については、LINEを嫌う先生もいますが、保護者との連絡ツールとしては結構使えますよね。あと、伝言ダイヤル171は聞かれたことがあると思いますけど、毎月1日と15日はテストができますし、普段でも「171」と押してみると「録音の方は1を押してください」「聞きたい方は…」というふうにやってみることができます。本格的に登録内容を聞こうと思うと、園の電話番号も入れないといけませんけどね。実際に愛知県では、園によっては保護者に連絡訓練を行っています。「どれぐらい保護者が聞いているか分からないですけど」とは言っていました。この伝言ダイヤルを使って保護者に発信する訓練をしているところもあります。

あとは、職員間の連絡体制です。普段は停電してしまうとハンドマイクしかないですよ。私のお勧めは「ぐるかむ」というものです。5人まで無料で使えて、実際に登録している園もあります。登録すると、こういう画面が出てきます。園長先生がしゃべると、5人なら5人全員に一齐に発信します。有料で登録すると文字も出てきます。有料版だと、それぞれの端末がどこにあるかも分かり、年長さんは今ここにいるというのが地図上に赤いマークで出てきます。そこまでいかないですけど、例えば園長先生と主任さんと2階担当の責任者と防災担当を登録しておきます。これは基本的にスマホが繋がらないことはなくて、緊急時もつながります。伝言ダイヤルも保護者との連絡では必要ですけど、職員同士の連絡には意外と使えると思います。

今度、警戒レベルが変わりましたよね。熱田福祉会では基本的に警戒レベル3の高齢者等避難になったら休園すると決めていて、保護者にも連絡しています。問題は、保育時間中に警戒レベル3から4に変わったときにどうするのかということですが、先ほど言ったようにルールとして既に決めていて、年度初めには保護者に説明しています。で

すから、「無理をしないで迎えに来て」「地下鉄を使う親御さんは無理しないでね」という確認をしています。

皆さんの園では、避難訓練で子どもたちがふざけて、おしゃべりしながら避難していませんか。私はいろいろな園を見させていただくのですが、時間的に余裕があるところは避難訓練を見てから講演させていただくこともあります。今年も9月に呼ばれたところは3年連続で呼ばれているのですが、レベルが上がっています。やはりここに来た先生たちが理解しているだけではなくて、全職員が同じ情報を共有すればレベルがもっと上がります。

実は先ほどの熱田福祉会も、うまくいっている状況ではないのですが、座っている方が主任さんで、これから放送するところですからけれども、空き缶に石ころを入れて、放送を入れるときにガラガラガラガラと音を出して、「これから訓練、訓練」という形でしゃべります。そして、避難の指示を出します。これは年長さんの部屋ですけど、皆さんの園でもやっていますよね。だんごむしのポーズです。避難経路の廊下は、こういう形で散らかして、実際に柵から物が飛び出したと想定した上で、地震では本来2階に逃げるといふふうに想定していますが、この日は地震に加えて給食室から出火したというダブル災害を想定して、園庭に避難しました。これは避難している場面ですが、実際にはおしゃべりしながら園庭に集まります。

この園では、最初の放送は主任さんが入れましたが、当日は園長、主任も勤務外という形でいなくて、あらかじめ決められていて抜き打ち訓練だったのですが、そのときは年長の担当が責任者になりました。この日は年長さんのクラス担任が休みだったので、4歳児担当の先生が責任者という形にして、ちゃんとやっていました。私の教え子だから顔は分かるのですが、どこでしゃべっているのかよく分からなかったという状況でした。そしてその後、年長さん、年中さんが集まった後に、未満児は2階にいるので、2階から下りてきていました。

これを実際には動画で撮ったのですが、全法人研修で流した上で、私がコメントを出しました。まず、「最初の放送が優し過ぎるので、指示口調、命令口調で構わない。明確にすっぱりと、避難せよという声掛けが必要です」と言いました。それから、年長さんなどは結構しゃべっていましたから、「子どもたちがしゃべるのは職員が集中していないからであり、普段から集中している姿を見せなさい」と職員にも駄目出しをしました。

それから、だんごむしのポーズですが、職員はどうするかという問題が出てきますよね。その園は震度6弱を想定していたので、机につかまれば大人だったら恐らく耐えられる揺れだろうと考えました。そして、保育園は意外とクラスが狭いので、上から落ちてくるものがほとんどないのです。蛍光灯が鎖でぶら下がっているようなところは危ないのですが、意外と落ちないので、であればつまりながら子どもの様子が見えるような視野を確保してもいいのではないかと言いました。

最大の問題は、3歳未満児が2階から下りてくるのに、なぜ園庭にいる職員は助けに行かないのか、クラスに1人残して他の職員は行くとか、そういうことが必要なのでは

ないか。階段を下りるのは自分で下りるのが目的ではなく、一刻も早く安全な所に行くことが目的で、未満児が階段を下りるときに余震として震度5弱が来るかもしれません。この状態で足元もおぼつかない子どもたちが階段を下りるのは非常に危険です。抱きかかえて、とにかく下ろしてから、それから考えてと指示しました。

この動画を見てもらいながら、法人全職員の研修をしました。今年は新型コロナの関係でなかなかできていないのですが、10月に防災担当の職員が順番に各保育園の避難訓練を見て回ろうと決めました。皆さん、他の園の避難訓練は見たことがないでしょう。公務員で園を異動して、前の状況は知っているという方はいると思いますが、そういうことも大事ではないかと思えます。

この熱田福祉会をモデルにしたのが、弥富市の十四山保育所というところですが、弥富市では、私が保育士向けの被災地ツアーを企画して、2人の園長先生が東北に実際に行っていました。私も話をして「これは大変だ」ということで、見てください。ここの園は海拔0mですから、どこかの堤防が切れたら必ず水没する場所です。2012年に行ったときに、「どこに逃げたらいいのですか」と聞かれて、「じゃあ、東北に行きますから一緒に誰が出してください」ということで2人の園長先生に行っていました、その年と次の年に交代で全職員研修をやって理解していただいて、自分たちで考えて、その後は時々しかのぞいていないのですが、実際にここまでは普通ですけど、この後、大人がたくさんいますよね。これは保護者や地域の人たちも参加した避難訓練です。これは保護者の人たちで、この方が園長先生でヘルメットをかぶって非常用持ち出し袋を持っています。熱田福祉会は誰も非常用持ち出し袋を持っていなかったのです。停電になることを想定して、各クラスに呼び掛ける。「各クラス、報告せよ」と言うと、部屋の中から野球の応援などに使うメガホンを持って、「さくら組、全員無事です」という報告を入れます。

もちろん廊下はぐちゃぐちゃの状況にしています。そして、必ずどこかにトラブルを発生させています。この日は、このクラスの子どもが体調不良で、「ちょっと今、様子を見ています」という返事をします。他のクラスは順番に出てきました。しばらくたってから、ここのクラスからメガホンで、「これから外に出します。ヘルプをお願いします」というふうにしゃべったら、園庭に既に避難している若い保育士2人が、「〇〇保育士、今から救援に向かいます」と大きな声を掛けて、ぱーっと走って行きました。園長の指示で「あなたとあなた行きなさい」ではなくて、自分で声を出してさっと動いていました。これは実際にシートにくるんでリヤカーに乗せているところです。こういう動きをしています。地震の途中にも余震が起こったので、だんごむしのポーズを取る形にしています。

さらに、「どこに逃げましょう」と言っていて、600m先のスーパーを当初予定していたのですが、公立園なのですが市に要求して、2,800万円をかけて避難タワーを屋上に造らせました。これは地域の人も要望を出していました。地域の人でも避難する所がないので、地域の人と保育士たちが一緒になって、別に組合が強いところではないのですが、

要望を出して造らせたのです。これは実際に避難しているところですが、ヘルメットをかぶっている人は先生、ヘルメットをかぶっていない人は保護者です。保護者にも「この子をおんぶしてください」と言って、自力で上がれない子どものためにおんぶひもが用意してありますから、おんぶして保護者にも手伝ってもらって上がってもらいます。

熱田福祉会でも、去年は行けませんでした。年1回ここに見学に行っていました。東北にも熱田福祉会として行っています。そういう形にして実際に周りを見ながら、準備しているものも避難者の必要な数だけ、ここは屋上に避難するからいいのですが、もしも一次避難場所が危なかったら二次避難場所に行くということで用意しています。津波想定区域ですから、常に園児分のライフジャケットを持っていますし、先生の標準スタイルで防災ジャケットを持っています。中にはこういうものが入っています。ライトとか、ホイッスルとか、これは名簿なのですが、本当に名簿は必要です。園に避難する場合はいいのですが、これは背中の方に入れるところがあります。こういうものも1万円以上するはずなのですが、用意しています。各クラスにはバッグも用意してあるので、こういうものを入れてあります。ですから、万一ライフジャケットなどを事務所に置いてあって、それを取って各クラスに持って行きます。ほとんどそういうふうに行っています。

もう一つ、これは年1回講演に入っているところですが、このときは公園に遊びに行ったときに地震が起こったという想定で、園以外の場所での訓練もしているところです。ちなみに、この園は私立園なのですが、園長先生が元消防士なので、私以上にめちゃくちゃ防災に詳しくて、園の中からも階段で屋上に上がれて園庭からも上がれます。ここは海拔0m地域で津波が必ず来る場所なので、造るときから屋上に水道の設備とトイレを設置してあります。ここは、先ほど言った「ぐるかむ」も常備しています。

備蓄品は、とにかく2階に避難するなら2階の取り出しやすい場所に置きます。社協などに講演に行って、「備蓄品はどこにありますか」と聞いたら、「市役所にあります」「それは駄目ですよ。取りに行けないですよ」ということもありました。それから、備蓄品は3日分は用意してください。

アレルギー対応食は、実際に東北でも喜ばれたと聞きました。あとはブログを見ていただければと思いますが、いつも泊めていただいていた所は、学生と共に寝袋を持って活動していたので、ここは2階に避難しましたので、食事は毎回分けます。園長先生は5日間、園に残っていたので、5日間ずっと乾パンを食べていて本当にしんどかったということで、レトルトのカレーの日もあれば、アルファ米の日もあるというふうで、食事ごとに分けて、誰がいてもとにかく上から持ってくればいいというふうにしています。

これは、先ほどの弥富市の事務所です。アレルギー対応としては、弥富市ではこういうものを作っています。百均でぴっと開けるものに、アレルギー対応食を入れてあります。実は京都の先生と話をしていたとき、こんな話をされました。豪雨のときに一緒に避難した高齢の方が「飴あげるわ」と言ってアレルギーの子どもに渡されたのです。そのとき気が付いたから良かったのですが、「ごめんなさい。この子はアレルギーなので」と

いうことで断りました。そういうこともあり得ますよね。こういうものなら110円でできます。どんな形でもいいのです。首にぶら下げるものでもいいですし、それぞれ工夫すればいいです。弥富市では、大体各園で六つとか八つぐらいタンクを用意しています。

保育が再開したら、水は出てきませんし、トイレも流せません。飲み水だけではなく、水が流せないというのは悲惨ですよ。女川ではどうしたかという、水がないのでストレスで年長さんでもお漏らししてしまいました。洗ってあげることができないので、そのまま干して次の日に乾いたら、ごわごわのパンツを渡します。0歳児はお漏らししても替える紙おむつがなくなってしまったので、ビニール袋に穴を開けて、ビニール袋をはかせました。

いわき市の保育園の先生は、便を触ったりしても水がないので、交代でタンクを持って給水所まで行って、人が並んでいますから、1回くむのに1時間半かかったと言っていました。でも、タンクがなければそれもできないですよ。バケツを持っていったらきりがありませんから、今から用意した方がいいと思います。簡易トイレは弥富市で用意していますが、手作りで、子どもたちだったらここにビニール袋2枚入れて、2段目のところに、小さいものでいいのでペットシートを裏返しにして入れて、それにおしっこやうんちをしたら縛って捨てるという感じでやっています。

3人キャリアもありますけど、こんなものは津波が来たらもう無理ですよ。30cmだと大人は流されませんが、ヘドロも混じっていて、がれきも流れてくるわけでしょう。こんな状況で津波想定区域だったら、一緒にのみ込まれて先生も亡くなってしまいます。それよりも、おんぶひもは子どもがある程度大きくなったら余っています。「うちはもう子どもを産まないから」「おんぶひも、ちょうだい」というふうにもらえるでしょう。

順番に用意する必要があるのではないかと思います。弥富市では自転車も用意しています。自転車ももらって登録し直して、園以外に避難する場合は自転車でも走ってきて、安全を確認するというふうにやっています。電源もなくなります。この辺は時間がないので見ていただければと思います。とにかく携帯、スマホ命でしょう。情報、連絡など、いろいろとあります。

2. 大規模災害発生後の対応

それから、大規模災害後ですが、ぜひ保護者の送迎ルートも2通りを考えて、普段は直近のルート、そこが危なければもう1か所、山側のルートなどいろいろ考えてみることも必要になるでしょう。先ほど言ったように、先生たちも安全なルートと早く通園できるルートの2か所を確保しながら、園長はそれを通じて的確な判断をする形になってくると思います。

それから、これは去年、泉佐野市で講演したときに質問が出て「ああそうか」と思ったのですが、先ほど日和幼稚園の話をしたように、送迎バスを運行している園はぜひマニュアルも作っていただければと思います。このマニュアルもホームページで公開しています。無料でダウンロードできますから、自分の園の状況に合わせて変えていただけ

ればいいと思います。

もう1点、これを忘れていませんか。給食室です。これは熱田福祉会の給食室ですけども、震度6弱が来たら、ここはどうするのでしょうか。調理員さんたちが避難訓練に参加していない園もあります。でも、どういう状況が想定されるかという、この棚は全部落ちます。そして、もし調理していたら鍋ごとひっくり返ります。震度5弱以上でガスはストップするので、元を切るのは後でいいからとにかく落ちるものから自分を守る訓練をして、自分の身を守った上で元栓だけ切って、あとはそれぞれ、例えばこちらの職員は0歳児のサポートに入るとか、こちらの職員は1歳児のサポートに入るとか、そういうトレーニングをしないといけないと私はいつも話しています。

こんな状況になります（避難所の写真を示す）。これでは子どもたちは遊べませんね。実際、私も避難所に入りましたが、子どもたちはこの中で遊んでいませんでした。泣くのも我慢しているような状況です。皆さんのクラスの発達障がいのある子どもたち、0～1歳の子どもたちに「泣くな」と言っても、電気が消えて真っ暗な中で、余震が続く中で無理でしょう。そうであれば、最初から学校に避難する予定で、ちょっと時間がないので省略しますが、指定避難所に物を置かせてもらって、あるいは部屋を交渉して、学校あるいは市と相談して、例えば小学1年生のクラスとか、1部屋確保してもらえます。ここに来れば体育館に避難しているお母さんたちも授乳できたり、相談に乗ってもらえたり、子どもがキャッキョと声を出したりできるようにします。自治体から来られている方はぜひ、自分の市の避難所の状況を見て、「あなたのところは小学1年生のクラスを空けるから、ここで親子の支援をして」という形になるといいと思います。

弥富市の公立保育所で、まだ屋上に避難タワーができていないところは学校に避難しますが、学校に紙おむつなどを置かせてもらっています。それなら子どもの避難に集中できるでしょう。ぜひそういうサポートを市の方でもしていただければと思います。

それから、皆さんの園で全く災害が来ていないところとはぜひ支援に入っていたきたいと思います。保育者のエプロン姿というのはものすごく安心感を与えます。顔は分からなくていいのです。避難者の方が声を掛けてくれます。「ああ、保育園の先生か」というふうに、ほっとされたような声を掛けてくれると思います。そのぐらい保育の力はすごいのです。

感染症対策に関しても、大阪は1人4㎡などと言いましたけれども、西半分がつぶれるような状況では、最初の2～3日はそういう状況ではなくなるでしょうね。受け入れる人は受け入れざるを得ないような状況になると思います。実は東北の私立園でも、地域の人たち、高齢者の方たちが指定避難所でも何でもないのに避難してきました。でも、「お帰りください」と断れないですね。大変ですけど、来た人はぜひ受け入れてあげてください。

ある自治体は各公立保育所に、「保育所は保育所運営費で賄われているのだから、地域の人には保育所運営費で出された給食は提供しないように」という指示を出しました。こんなことができますか。子どもが避難してきて、園児にはおやつを配るけど、「あな

たは園児じゃないよね。おやつはあげられない」とは言えないでしょう。その辺は本当に被災した人たちの立場に立って考えれば分かる話なのですが、ぜひそういう縦割り行政ではなくて住民はみんなで守るということが必要ではないかと思います。

避難所のマニュアルも、熱田福祉会ではけやきの木保育園というところが避難所に指定されているので、そういう体制を取っています。ブログに確か載っていたと思います。園が被災しなかった場合には、支援に入ります。それは市全体で、例えば「一時保育、うちは〇名受け入れます」というふうに園の方からすぐに市に連絡を取ったり、「保育士を交代で派遣するけど、市の方でまとめてください」という声を上げて、交代で行くことにしています。

現場はそのときの状況を見て最善の判断ができるようにします。ある自治体では、避難経路を変えるときは市の指示を仰ぐこととしています。でも、市役所に絶対に電話はつながらないですよ。「津波が来ていて、あそこの避難所に行けないんですけど」というときに、市役所に電話ができないから避難が遅れたというのでは駄目でしょう。だから、市にマニュアルがあるのだったら、「最終は市の現場責任者の判断で最善の行動を取ることに」ぐらいの一文を入れておけば、園長先生も判断して動けます。そういうことが大事ではないかと思います。

まとめ

まとめに入ります。先ほどから紹介しているように、「東北の保育者たちに学び、備える」というブログを更新していますし、職員研修が大事ですので、今はリモートでの講演などもできるので、ぜひ園単位、市単位での研修を考えていただければと思います。

最後になりました。ずっと避難所に入っていたのですが、仮設で学生たちと活動していたときに、高齢者の方がこんなことを言いました。その方は船も流されて、奥さまも流されて、家も流されて、何もかもなくなった方です。私と仮設住宅のベンチに座りながら学生と子どもたちが遊んでいる姿を見て、ほそっと語られました。「全てを失ったけど、子どもたちの笑い声はいいな。子どもたちは石巻の未来だ」。確かに、子どもが騒ぐと最初は怒りを買うのですが、復興に向かうときに子どもたちの笑い声や笑顔は住民を勇気付けます。

保育の仕事は大変ですけど、子どもの命を守る保育の仕事は大事ですよ。お医者さんに負けないぐらいの大事な仕事をされています。そういう意味では報われる仕事ではないかと思いますが、最もその力が発揮されるのは大災害のときだと思います。このことを語り継ぎながら、皆さんが長く働き続けることによって経験を積まれて、どんな状況でも対応できる力が付いてくると思いますので、大変ですけどぜひ頑張ってお仕事を続けていただければと思います。